

令和5年度 学校推薦型選抜 経済学部 小論文
出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

日本人の健康寿命と運動習慣に関する資料から出題した。現代社会では、今後さらに進むと考えられている少子高齢化の中で、医療費や介護費用に掛かる国の財政負担を軽減するためには、「日常的に介護を必要とせず、心身共に自立して暮らすことができる期間」を意味する「健康寿命」を延伸させることが重要であるとされ、国は様々な施策を行っている。そのうち、「適度な運動」がいわゆる生活習慣病の罹患リスクを低減するということが科学的根拠とともに示され、日常生活の中で積極的に運動を取り入れることが推奨されている。新型コロナウイルス感染症の拡大が日本のみならず世界の経済に大きな打撃を与えている状況があり、人々の健康と経済活動を両立させなければならない難しい社会情勢が長期化の様相を呈する中、様々な傷害や疾病を予防する重要性、そのためには適度な運動習慣がいかに重要であるかを実体験に基づく主観とデータに基づく客観の両面から論じられるか否かを問う問題である。

設問1では「介護を必要とした要因」と「死因」の2つのデータを見比べ、現代社会における日本人の健康上の問題点を読み解くとともに、そこから健康寿命を延伸させるために必要な対策を考察させている。解答のポイントとして、

- 「介護を必要とする状態」と「死に至る」こととは必ずしも一致しないという点に気付き、端的に説明できるか。
例) 介護を必要とした要因の第1位は「認知症」であるが、死因の中に認知症は含まれない(アルツハイマー病がそれに近いが、1.5%しかない)。死因の第1位は「悪性新生物(がん)」であるが、介護を必要とした要因の中で悪性新生物(がん)はわずか3%である。「脳血管疾患」は介護を必要とした要因の第2位(16%)であるが、死因では第4位(7.7%)。
- 健康寿命を保つために「適度な運動」が重要であることが冒頭の説明文で述べられているので、設問の前半で述べた健康上の問題点を解決するために運動習慣がどのように寄与するかを自身の考えとしてどの程度論理的に説明できるか。

の2点が評価を分けると考える。

設問2では、設問1で健康上の問題点を解決するためには適度な運動習慣が重要であることを認識させながらも、一方で適度な運動を習慣化させることは非常に難しいという現実に対し、その原因をデータから読み解くとともに、その解決策を「まちづくり」という観点から考察させている。解答のポイントとして、

- 表1から、運動不足を感じている人は経年的に増加傾向にあるにも関わらず、運動・スポーツの実施率はわずかに低下傾向にあるという点、注意書きから運動・スポーツの実施率は一見高いように見えて、その質はかなり低いのが実態であるという点に気付き、端的に説明で

きるか。

- 図3の運動実施阻害要因の第1位である「仕事や家事が忙しいから」という理由づけがやむを得ない理由であるかのように見えて、その実態は第2位の「面倒くさいから」が真の理由であり、表1の見せかけの高い運動・スポーツ実施率とともに、表面的なデータの裏に潜む人間の深層心理、つまり、「運動は重要だと頭では分かっている、何かと理由をつけて運動しない、しているから大丈夫と自分自身に言い聞かせる」＝行動心理学で言うところの「防衛機制」が働いていることに気付けるかどうか。
- 運動・スポーツをすることに抵抗感があつたり消極的な人に対し、どうしたら習慣的な運動を生活の一部として取り入れられるのかを「まちづくり」という観点から論理的に説明できるかどうか。主体性、論理性、新規性、行動心理学のセルフエフィカシー（自己肯定感）と意思決定バランスの観点がどの程度含まれているか。

例）仕事や家事が忙しいという人でも運動しやすいように、職場や自宅の近く、ショッピングモールの中、すべてのコンビニの駐車場等、アクセスしやすい場所に無料で使えるエクササイズスペースを作る。

の3点が評価を分けると考える。

【解答の傾向】

全体を通して、図表に示されている客観的事実をただ説明しているだけの解答が多く、図表から重要な情報を読み取り、その情報がどのような社会情勢や人間の行動・心理を反映しているのかについて深く考察している解答が極めて少なかった。

設問1では、問題文に「図1と図2を比較し」とあるので、少なくとも両者を比べた時に共通する部分・しない部分に気付かなければならない。また、そこから炙り出される「現代社会における日本人の健康上の問題点を指摘」し、「健康寿命を延伸させるための対策」について自身の考えを500字という限られた中で論じなければならず、むしろそれこそが最も大きな評価の対象であるので、ただ図表に示されている事実だけを解答用紙に書き連ねても、それは「読解」、「小論文」ではない。

また、図表読解の問題では与えられた情報からどこまで論理的に課題解決の方法を論じられるかが重要であるが、図表には全く示されていない根拠のない情報（テレビで見た、等）を用いて飛躍した持論を展開する解答（私の祖父母は〇〇を実践している、等）も散見された。

設問2では「『適度な運動』を取り入れ、習慣化させるためにはどのような対策が必要だと考えるか」を「『まちづくり』という観点から」という条件付きで論じることが求められていた。しかし、解答としては「ラジオ体操をする」、「スポーツイベントや大会を開催する」、「歩いた歩数をスマホのアプリで記録し、それに応じて地元の商店で利用できるポイントを付与する」等が大半を占めていた。これらは一見すると妥当性のある解決策のようにも思えるが、設問では運動を「習慣化させる」対策が求められているので、スポーツ大会やイベントなどの単発で終わるものや物理的な条件が課されるもの（スマホを持っていない、移動手段として車が必須の場合、等）では

継続性を得ることは難しい。それらはすでにまちの中に存在しているものであり、しばしば見かけるものであって、その結果として現在の運動不足な状態が示されているわけで、現状を変える対策としては不十分である。人々が暮らす「まち」の中に、生活の一部として運動が必須となるような新しい仕組み、仕掛け（ナッジ）をどのように作れるかについて、高校生らしい自由なアイデアを論じてくれることを期待していたが、そのような解答が少なかったことは残念であった。

また、論文を作成する上で、採点者が読み取りやすい文字で書く（丁寧さ、濃さ、等）、誤字・脱字に注意する、文の始まりに「私は」を用いない、「～なのだ」といった断定的な表現を用いないなど、基本的な作成技法が身に付いていない受験生が多いように感じた。